

「伝えること」の大切さを知ってほしい…

＜伝えるフクシマ～ジャーナリズムとは何か～＞の開催

「よく、県外から来る人に『何をしてほしいですか?』と聞かれるのですが、僕たちにとって一番うれしいことは、福島に来て感じたことを日本や世界中の人々に広めてもらうことです」巨大なスクリーンの向こうから、福島に住む大学生が語ったことは、物資支援や資金援助ではなく、意外なことだった。

福島の「生」の声



モニター越しに福島の現状や思うことについて明るく語る福島の学生たち

まだ冬の寒さが続く 3 月 20 日、産経新聞東京本社で学生団体ジャーナリズム学生委員会主催の＜伝えるフクシマ～ジャーナリズムとは何か～＞と題したイベントが開かれた。先の福島に住む学生の言葉は、その中で彼らの話を聞いた際に出てきたものだ。

午前中の講演で、参加者は受付時に配られた白紙に、おのおのがポイントとなる点を真剣な表情でメモしていった。特に、参加者の表情が真剣になったのは、この福島に住む学生たちの講演だった。Skype を利用し、リアルタイムで福島と東京をつなぎ、福島に住む学生の「生」の声を聞いたのだ。

会場に設置された大きなスクリーンには福島の今と、これからの展望について懸命に、しかし明るく語る二人の学生の姿に、参加者の視線がくぎ付けになった。

「刺激を受けた」



イベントに参加した学生たち。皆真剣な表情で取材をしていた。

その後、昼食をはさみ、午後はイベントに参加した13人の大学生たちがグループになって午前中に聞いた話をもとに、東京の会場で新聞を作成するという参加型イベントであった。

午後の新聞作成は、ほぼ全員が初対面であるにもかかわらず、皆すぐに打ち解けて終始和やかな雰囲気であった。2時間といった限られた時間内での新聞作成は多くの参加者が難しいと感じたようだ。しかし、参加者一人ひとりが活発に意見を出し、すべてのグループが記事を作成することができた。

さらに、新聞作成終了後、もう一度 Skype で現地とつなぎ、福島の学生とともに各グループが作成した記事を読み、意見を交換した。イベント終了後のアンケートでは「大いに刺激を受けた」「福島のことを忘れずに伝えていく努力が必要だと感じた」などの感想が参加した学生たちから寄せられた。

「伝えること」の大切さ



記事作成に取り組む学生たち

2012年1月5日、東京・大手町。世間はまだお正月休みで、普段はオフィス街としてにぎわっている大手町は、人もまばらで、静まり返っていた。

そんな冬の日、「学生たちにもっとジャーナリズムに関心を持ってもらいたい」というSANKEI EXの呼びかけに共感した都内の大学生7人が産経新聞東京本社10B会議室に集まり、ジャーナリズム学生委員会の結成式を行った。

当初、決まっていたことは「学生たちを対象とした、ジャーナリズムをコンセプトにしたイベントを開きたい」のみ。ここから、真新しいキャンパスに絵を描くように、メンバー全員で企画を考えていった。

「伝えることの大切さを知ってもらう。そんなイベントを開こう」2月初旬のミーティングで代表の鬼頭慶多がこう言った。

「伝えること」と「ジャーナリズム」は必ずしもイコールではない。しかし、現代の大学生は「ジャーナリズム」の根幹を成す「伝えること」がうまくできないのではないか。そんな鬼頭の問題意識にメンバーが賛同し、「伝えること」の大切さを前面に押し出した、学生による学生のためのジャーナリズム企画が一気に動き出した。

「伝えること」の大切さを知ってもらうためのイベント

その企画の第一弾として、上記のイベントを開いた。意見を言える場を作る前に、まずは学生たちに今の社会に対する問題意識を共有してもらおうというのが狙いだ。グループでの記事作成で、「震災」という今の日本が抱える大きな問題に対する意識を共有することができた。

また、福島の学生との2度にわたる意見交換の時間により、自分たちが書いた記事という「伝えたいこと」に対し、フィードバックを得ることも実現した。

「打てば響く」を実現



Journalism Student Committee

ジャーナリズム学生委員会のロゴ。

私たちの最終目標は「言いたい人が意見を言うことができ、それに対するフィードバックがある世界、打てば響く世界の実現」である。大げさに言えば、「世界を変える」ということだ。7人の大学生が世界を変えようなど、寝言を言っているように思われるかもしれない。

しかし、このイベントをきっかけに、一人でも多くの学生の意識を変え、活発に議論ができるようになれば、大きな大前進だというのがメンバー全員の思いである。

文：野村有希（中央大学2年）